

## 「ベラウ国立博物館開館 50 周年記念特別展示-パラオの日本建築文化-」の概要

正会員 柏木史成\* 同 辻原万規彦\*\*  
正会員 今村仁美\*\*\* 同 西 英子\*\*\*\*

南洋群島 南洋庁 復元  
模型 展示

## 1. はじめに

筆者らは、2001 年以来、パラオ共和国に残る日本統治時代の建築物に関する研究を続けてきた<sup>i), ii), iii)</sup>。これまでの研究成果を基に、2005 年 9 月 30 日から 2006 年 3 月末日まで、同国ベラウ国立博物館で、日本統治時代の建築物に関する展示を行った。この展示の概要と展示の準備に伴って新たに得た知見などを報告する。なお本報では、当時の用語や呼称をそのまま用いた。また以下では、原則として引用文などは、現代仮名遣いに改めた。

2. 展示の概要<sup>iv)</sup>

1955 年に開館した、ミクロネシアで最も古いベラウ国立博物館は、開館 50 周年にあわせて新館をオープンさせ、記念事業を行った。この記念事業では、“Palau Through the Years” と題する展示が企画され、パラオをかつて統治したスペイン、ドイツ、日本、米国の時代の歴史に関する展示が行われた。このうち日本の時代については、ベラウ国立博物館と在パラオ日本大使館が担当する「日本統治時代の歴史・文化展」と共に、熊本県立大学辻原研究室が担当する「ベラウ国立博物館開館 50 周年記念特別展示-パラオの日本建築文化-」が含まれ、ベラウ国立博物館の一室において展示された(写真 1, 写真 2)。なお、この展示にあたっては、国際交流基金の平成 17(2005)年度海外展助成事業の援助を受けた。

「パラオの日本建築文化」展の内容は、現在もパラオに残っている日本統治時代の建築物に関するパネルを中心に、復元および現状模型などである(表 1 参照)。さらに、パラオ共和国の「コロールにおける日本統治時代の建築物」の位置を表した地図も併せて展示した。また、観覧者のためのパンフレットも用意した。

展示準備にあたっては、主にこれまでの研究成果を用いたが、南洋庁本庁庁舎とパラオ熱帯生物研究所の復元模型製作にあたっては、新たに資料収集を行った。



写真 1 展示室の様子



写真 2 展示室の様子

また、これら以外の建築物の模型製作の際にも、様々な検討の結果、従来判明していなかった点が数多く判明した。特に、パラオ無線電信所庁舎(現パラオ国会議事堂)は大正 12(1923)年の竣工であることがはっきりとした<sup>v)</sup>。これはパラオに残る日本統治時代の建築物のうち、現在判明している最も古いものである。

表 1 展示物の詳細(数字は縮尺)

日本統治時代の名称	現在の名称	復元模型	現状模型	パネル
南洋庁本庁庁舎	(現存せず)	1/150	-	
パラオ熱帯生物研究所	(一部基礎などのみ現存)	1/100	-	
南洋庁パラオ支庁庁舎	パラオ最高裁判所庁舎	1/125*	1/150	
パラオ無線電信所庁舎	パラオ国会議事堂	1/150	1/150	
南洋庁パラオ医院本館	パラオ・コミュニティー・カレッジ事務棟	1/150	-	
南洋庁観測所庁舎	ベラウ国立博物館旧館	1/150	1/150	
南洋庁気象台庁舎	社会文化省芸術・文化局庁舎	-	-	
海軍無線電信受信所庁舎	資源開発省土地測量局	1/150	-	

\*: アクリル製(それ以外は、全てパルサ製)

## 3. 南洋庁本庁庁舎の復元

## 3.1 南洋庁の概要

南洋庁は、大正 11(1922)年に臨時南洋群島防備隊を廃止した後、そのうちの民政部を受け継いで、委任統治領南洋群島の行政機関として新たに設置された<sup>vi)</sup>。

南洋庁本庁の庁舎は、木造<sup>注 1)</sup> 2 階建ての建物であるが、執務室はほとんど 2 階にあり、1 階は倉庫などとして使用されていた<sup>vii)</sup>。当初は、南洋庁本庁の他、パラオ支庁、パラオ郵便局、高等法院、パラオ地方法院なども同居していた<sup>注 2)</sup> が、後には南洋庁本庁のみで使用するようになった。南洋庁本庁の庁舎は、委任統治期の最も初期に建てられた建物であり、資料が少なく、設計者をはじめ詳細は現在のところ不明である。

## 3.2 南洋庁本庁庁舎の復元の手順

復元については、資料の収集、基本寸法の決定、平面図の復元、立面図の復元、復元模型の作製という手順で行った。なお、復元にあたっては、入手できた写真の数が最も多い昭和 10 年代の姿を復元した。

## 3.3 今後の課題

1 階、2 階共に、内部の部屋がどのように使用されていたのかについては、現在のところほとんどわかっていない。部屋の使い方は時代により大きく変化したと考えられるが、これらの検討は今後の課題である。

## 4. パラオ熱帯生物研究所の復元

## 4.1 パラオ熱帯生物研究所の概要

パラオ熱帯生物研究所は、日本学術振興会第 7 常置委員会第 11 小委員会に所属する研究所として、熱帯生物学、

特に珊瑚礁に関する生物学的研究を行うことを目的に、当時東北帝国大学教授の畑井新清司を所長に迎えて、昭和9(1934)年に設立された<sup>viii)</sup>。本研究所の研究員の中には、後に、その分野の世界的権威となった者も多い。また、英文論文集が定期的に発行され、日本の珊瑚礁研究のレベルを世界レベルに引き上げただけでなく、世界の珊瑚礁研究をリードした点でも非常に意義深い。

#### 4.2 パラオ熱帯生物研究所における建物の整備

昭和13(1938)年6月に発行された『科学南洋』(1巻1号, pp.6-7)(以下、例えば1巻1号の1ページを「科学南洋(1-1, p.1)」などと表す)では、研究所内の諸設備の概略が次のように記されている。

1. 実験室 平屋建木造家屋一棟(約7m×11m)  
大実験室, 写真用暗室, 部屋番室
2. 海水タンク1個 容量5トン
3. 淡水タンク4個 容量9.8トン(内訳5トン1個, 1.6トン3個)
4. 物置及び便所1棟(約5.5m×3.6m)
5. 電動機室及び物置1棟
6. 採取船パバヤ号(石油発動機2馬力半装備)
7. 採集船マンゴー号(棧及帆装備)
8. 図書
9. 珊瑚標本陳列室
10. 宿舍

実験室(研究室とも呼ばれる。内部の「大実験室」と区別するため、以下、研究室と表す。)では何度か改修が行われた。昭和13(1938)年5月頃には、通風を良くするために新たに窓を設けた。昭和14年夏には、宿直室のような流し場のような小部屋が改造されて小実験室となった。昭和14(1939)年12月には、実験室内の窓の新設によって研究員の席が2つ増え、5名を一時に収容できるようになった。昭和15(1940)年夏には、新実験室の建設に伴い、暗室を研究室に改造した。

昭和14(1939)年12月には木造平屋建ての畑井記念図書室(科学南洋(2-1, p.52))が建設された。

昭和15(1940)年には、木造平屋建ての新実験室が建設された(6月9日着工, 11月末(10月末とも)完成)。

#### 4.3 パラオ熱帯生物研究所の復元

パラオ熱帯生物研究所については、畑井記念図書館、研究室、新実験室、その他の建物を復元した。なお、復元模型の製作は、昭和15年頃の様子を復元した。ただし、地形については正確に復元できてはいない。

#### 4.4 現地調査との比較

2005年10月に、再度現地調査を行うことができた。そ

の結果、研究室、新実験室、物置(便所含む)ならびに電動機室(物置含む)の基礎(現在は、その上に当時のものとは異なる建物を建てている。)、船着き場などが残っていることを確認した。また、新実験室の正面から向かって右面には階段があったこと、背面には石積みの擁壁を建設して敷地を広げていたことなどが確認できた。これらの新しい知見は、今回の復元作業には反映されておらず、今後の検討課題である。

#### 5. まとめ

本報では、これまでの研究成果を基に、2005年9月30日から2006年3月末日まで、パラオ共和国ペラウ国立博物館で開催された日本統治時代の建築物に関する展示の概要、展示の準備に伴って新たに得た知見や南洋庁本庁舎とパラオ熱帯生物研究所の復元について報告した。また、2005年10月の再調査で新たな事実が判明したが、これらの検討は今後の課題である。

#### 謝辞

展示にあたっては、ペラウ国立博物館館長 Ms. Faustina K. Rehuher はじめスタッフの皆様、在パラオ青年海外協力隊員(当時)の山口孝彦氏、在パラオ日本大使館専門調査員(当時)の三田貴氏にご協力いただいた。また、「日本無線史」については、電気通信大学歴史資料館学術調査員の田中正智先生にご教示頂いた。パラオ熱帯生物研究所の資料収集にあたっては山下彌三郎氏のご子息三長氏にご協力頂いた。なお本報の一部は、平成13~14年度科学研究費補助金(奨励研究(A)、若手研究(B)、課題番号13750557)、平成13年度(第39回)三島海雲記念財団学術奨励金、平成16~17年度科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号16760520)によった。記して謝意を表す。

#### 注

注1) 当時の写真から1階部分の外周の柱は煉瓦造であることがわかっているが、1階全体が煉瓦造であるとの確たる理由は、現在のところ、見つかっていない。

注2) 大正14(1925)年発行の写真集の門柱には、5つの官署の門札が掲げられていた<sup>ix)</sup>。

#### 参考文献

- i) 辻原, 今村, 香川: パラオ・コロールにおける日本委任統治時代の建築物の残存状況と旧パラオ支庁庁舎, 日本建築学会九州支部研究報告, 第42号・3〔計画系〕, pp.609-612, 2003.3.
- ii) 辻原, 今村, 香川: 旧パラオ医本館と旧南洋庁観測所および氣象台庁舎について, 日本建築学会九州支部研究報告, 第42号・3〔計画系〕, pp.613-616, 2003.3.
- iii) 辻原, 今村, 岡本: パラオにおける日本委任統治時代の建築物に関する2003年と2004年の調査, 日本建築学会九州支部研究報告, 第44号・3〔計画系〕, pp.749-752, 2005.3.
- iv) Belau National Museum: Imuul Newsletter, Vol.1, Iss.1, September, 2005.
- v) 電波監理委員会: 日本無線史 第十二巻, 電波監理委員会, pp.278-279, 1951.6.
- vi) 南洋庁長官官房: 南洋庁施政十年史, 南洋庁長官官房, pp.35-38, pp.46-56, 1932.7.
- vii) 能伸文夫著, 小菅輝雄編: 復刻版 南洋紀行 赤道を背にして, 南洋群島協会, p.57, 1990.5.
- viii) 日本学術振興会: 特別及ビ小委員会ニヨル総合研究ノ概要, 第3回, 日本学術振興会, pp.189~204, 1938.5.
- ix) 南洋協会南洋群島支部編: 日本帝国委任統治 南洋群島写真帖, 南洋協会南洋群島支部, ページ番号なし, 1925.5.

\*熊本県立大学大学院環境共生学研究科

\*\*熊本県立大学環境共生学部 助教授・博士(工学)

\*\*\*アトリエ イマージュ

\*\*\*\*熊本県立大学環境共生学部 講師・博士(学術)

\*Graduate Student, Prefectural University of Kumamoto

\*\*Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.

\*\*\*Atelier Image

\*\*\*\*Lecturer, Prefectural University of Kumamoto, Ph. D.